下肢静脈瘤超音波検査	S014
	担当部署
下肢静脈瘤エコー	生理

検査オーダー

患者同意に関する要求事項		該当なし
オーダリング手順	1	電子カルテ→指示①→生理→血管エコー→下肢静脈エコー(DVT)(中検技師)→コメント対応
	2	電子カルテ→指示①→生理→表在エコー→＊血管エコー検査→下肢静脈エコー(DVT)(中検技師)→コメント対応
	3	
	4	
	5	
検査に影響する臨床情報		①超音波の物理的要因 超音波の基礎理論は難解であり、日常検査を行ううえでかならずしもすべてを理解していなくても検査を行うことは可能である。しかし実際には、遭遇する多様な超音波像において、虚像の発生など基本的な知識については知っておかないと判読を進めていくことが困難となる。 ②解剖学的要因 超音波検査は多方向から断層像を得るため、立体的な解剖学の知識、正常変位、個人差による画像の変化、血管と骨格や肺、消化管ガスによる障害などについて理解していないと、得られた画像を判読していくことが困難である。
検査受付時間		8：45～17：30

検体採取・搬送・保存

患者の事前準備事項	1) 検査直前の激しい運動は避ける。 2) 下腿部を露出してもらい、基本は立位で検査施行。必要に応じて半座位で検査を行う。
検体採取の特別なタイミング	特記事項なし

検体の種類		採取管名	内容物	採取量	単位
1	人体(下肢静脈)	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし
2					
3					
4					
5					

6					
7					
8					

検体搬送条件	ベッド可能
検体受入不可基準	1)体動が激しく安静を保つことができない患者 2)立位及び半座位の体位を維持できない患者 3)検査に同意を得られない患者 4)閉所恐怖症、暗所恐怖症の患者(ドアを開放しての測定や室内灯を点けて検査を実施出来る場合は実施する。) 5)身体的な理由によりエコーゼリーの付着やプローブの接触が困難な患者（可能であれば他の位置から検査を施行する。)
保管検体の保存期間	特記事項なし

検査結果・報告

検査室の所在地	病院棟 3 階　中央検査部
測定時間	半日(診察前：1 時間)
生物学的基準範囲	大伏在静脈、小伏在静脈ともに逆流を認めない。
臨床判断値	該当なし

基準値				単位	特記事項なし
共通低値	共通高値	男性低値	男性高値	女性低値	女性高値
特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし

パニック値	高値	該当なし
	低値	該当なし
生理的変動要因		該当なし
臨床的意義		静脈瘤は立位時に表在静脈が拡張し、屈曲蛇行した状態である。これは静脈弁の機能異常により、弁逆流が生じ、下肢静脈圧の上昇を伴い、静脈が拡張し、発生する。近年の超音波診断装置は下肢静脈弁を描出することも可能である。しかし下肢には静脈弁が多数存在し、1 つずつ機能評価するのは困難である。そのため弁機能不全の診断は、拡張した静脈を検索し、弁に血流負荷をかけ逆流を確認することで行われる。超音波検査では弁不全の存在範囲や由来静脈(大伏在静脈、小伏在静脈、穿通枝)を検索し、各静脈瘤の正しい病態を把握することが重要である。